

望ましい学校教育環境の要素別メリット・デメリット一覧

三次市教育委員会

(作成日：平成21年12月11日)

項目	メリット	デメリット
(1) 発育上の適正	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校行事等で、一人ひとりの果たす役割が大きく、その活動を通して、自覚と責任感を高めることができる。 ○ 互いの結びつきが強く、互いの思いや行動傾向を汲み取って行動することができる。 ○ 地域住民と全校児童が互いの顔と名前をわかっており、人間的結びつきが強い。 ○ 行事等では、学年・年齢間を超えて活動することが多いため、他学年とのつながりが深まり、上級学年の子どもにはリーダーとしての責任感が醸成されやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1学年が1学級の場合、卒業まで同じ集団で過ごすことで、学級の中での役割や子どもの価値観が固定化されがちである。 ○ 幼い頃からの固定した人間関係をそのまま引きずり、新たな人間関係を形成しにくい。 ○ 友人同士やクラス間で競争する場面など、切磋琢磨する機会が少ないため、競争心や向上心など社会性が育ちにくい。
(2) 教科指導、学校生活上の適正	<ul style="list-style-type: none"> ○ 理解度や達成度など、個に応じたきめ細やかな学習指導ができる。 ○ 運動場や特別教室、学校設備など、一人分を余裕を持って使うことができる。 ○ 少人数であるため、社会見学や職場体験などの際、選択肢が多く、子ども一人ひとりが多様な体験ができる機会を設けやすい。 ○ 学習や部活動などで、一人ひとりの活躍の場が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体育の授業での団体競技や音楽など、一定規模の集団を前提とした活動が困難であり、効果的な学習を組織しづらい。 ○ 部活動は実施数が少なく、子どもに十分な選択肢を用意することができない。 ○ 学習や活動に広がりが少なく、よりよいものを求めようとする環境をつくりづらい。
(3) 生徒指導上の適正	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家庭的な雰囲気の中で一人ひとりに目が行き届き、きめ細やかな指導ができる。 ○ 児童生徒一人ひとりの特性や能力を把握しており、どの教職員においても、個別の対応が可能である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友人との人間関係の固定化、序列化を招くおそれがあり、いじめ・不登校などの人間関係上の問題が発生した場合、クラス替えによる人間関係の改善を図ることが困難であるため、逃げ場がなくなる。
(4) 学校経営上の適正	<ul style="list-style-type: none"> ○ 緊急時に一斉行動する際に、子どもの掌握や指導が迅速にできるため、適切な安全管理を講じやすい。 ○ 教職員の共通理解が得やすく、状況の変化にも臨機応変に対応することができる。 ○ 家庭や地域の支援・協力を得られやすく、地域に根ざした教育を推進しやすい。 ○ 児童生徒、教職員、地域が一体となって学校や地域の伝統行事等を継続する体制を作りやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通常担当する以外の業務もこなす必要があることから、教職員が多忙となり、落ち着いた業務がしづらい。 ○ 教員数が少ないため、学年経営や学級経営において、教員相互の支援が困難である。 ○ 中学校では、同一教科での教員相互の連携や相談の機会が少なく、教科経営に支障を来たす。 ○ 一人の教員が複数の校務分掌を兼ねることが多くなるため、その事務に時間を要し、子どもに接する時間や教材研究を行う時間が制限される。
(5) 教員力量形成上の適正	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教職員の学校運営への参画意識が高まり、責任感の醸成につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研修等で教員が学校を離れる場合、代わりとなる指導者がいない状況ができてしまう。 ○ 教員間の教材研究や指導方法について、単独で取り組む状況になりやすく、内容が深まらなくなる。 ○ 新任・若手教員の育成が難しい。 ○ 専門以外の教科・分野も担当することから、専門性を発揮した指導を行いにくい。